慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	グレフュール伯爵夫人未刊行書簡 : エドモン・ ド・ ゴンクール宛 (22通)
Sub Title	Vingt-deux lettres de la comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.55 (2023.) ,p.69- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20231231-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

グレフュール伯爵夫人未刊行書簡
エドモン・ド・ゴンクール宛（22 通）

山本　武男

エリザベート・リケ・ド・カラマン＝シメイ（Élisabeth Riquet de Caraman-Chimay, 1859–1952），即ちグレフュール伯爵夫人の名は，マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』（1913 ～ 1927 年刊）のヒロインのうちの一人，ゲルマント公爵夫人の主要なモデルだとして夙に知られる。グレフュール伯爵夫人は『ゴンクールの日記』に於いても，1888 年に初登場して以降，作者エドモン・ド・ゴンクールが没する 1896 年まで登場する「主要人物」の一人である。その従兄であるロベール・ド・モンテスキウ＝フザンサックは，矢張りプルーストの上記大長編小説のシャルル[1] 男爵の主要なモデルとされるが，モンテスキウは『ゴンクールの日記』の最後の日付である 1896 年 7 月 3 日（金）に登場し，ゴンクールと夕食を共にし，花々の間を歩き，汽車の車内でゴンクールがモンテスキウの話に耳を傾けている描写で終わるのである。その十数日後[2] に，パリ郊外シャンロゼのアルフォンス・ドーデの別荘で，ゴンクールが逝去する事を考えると，悲しくも美しい旅立ちが期せずして記されたかの様だ。グレフュール伯爵夫人やロベール・ド・モンテスキウはプルーストの手になるより前に，エドモン・ド・ゴンクールの筆により，文学史上にその印象的な姿を刻印された。プルーストもそれを意識して，その大長編小説の最終巻で『ゴンクールの日記』のパスティシュをした。言わば「種明かし」である。『ゴンクールの日記』無くしてあの大長編も書かれなかったと。あのパスティシュには，プルースト憧れのグレフュール伯爵夫人に尊敬され慕われたエドモン・ド・ゴンクールへの敬意と，氏を乗り越えんとする後輩作家としての矜持が見えるであろう。

エドモン・ド・ゴンクールは，グレフュール伯爵夫人に慕われた。日本美術愛好家にしてその研究者として。そしてまた，当代きっての，多大な影響力を持った文豪として。そしてまた第二帝政下，ナポレオン三世の従妹に当たるマティルド大公妃のサロンの常連でもある一流の

1）　本論文筆者が，1997～98 年にパリ第四大学，即ちパリ＝ソルボンヌ大学学士課程在学時，プルースト学の権威，ジャン＝イヴ・タディエ（Jean-Yves Tadié）教授（当時）は，『失われた時を求めて』の第 4 巻，『ソドムとゴモラ』を講じつつ，Charlus を「シャルリュ」と，講堂で発音されていた。日本では屢々，「シャルリュス」と音訳されているが。

2）　エドモン・ド・ゴンクールは 1896 年 7 月 15 日に逝去する。

社交人士としても。『ゴンクールの日記』では，矢張り注目すべきは，グレフュール伯爵夫人に，当代の上流社交婦人を小説で描くべきと勧められ，夫人本人をモデルにしてはと仄(ほの)めかされていると感じ，軈(やが)て熟慮の末断り，また，伯爵夫人本人の著作の出版の協力を求められて断る件であろう。1894 年 7 月 6 日（金）付の箇所で，ゴンクールは，伯爵夫人の著作の主要部分を複数引用している。結局，社交界の嫉妬を惹起する危惧から作家は出版の協力を断った。一方，グレフュール伯爵夫人からエドモン・ド・ゴンクールに宛てた書簡では，伯爵夫人が，音楽の協会を主宰し，パリのみならず，海外でも活動していた事情の詳細が明らかになる。そう言った面では，1892 年 2 月 29 日付の書簡で，ウィーンでの公演に際し，エドモン・ド・ゴンクールの名前を貸して欲しい旨，希望している事など注目に値しよう。また，従兄モンテスキウの作品の批評をゴンクールに書いて欲しいとの手紙も見られる。文学を愛好し，また自らも文学作品を試みていた公爵夫人は，その従兄の詩業をも熱心に応援していたのである。

ゴンクールに，当代の上流階級の婦人を描く，恐らくは伯爵夫人本人をモデルとすることを意図した小説の執筆を勧め，また自身が書いた著作の出版への協力を仰いだグレフュール伯爵夫人の希望は果たされなかったが，前者の希望を果たしたのはプルーストだった。プルーストは『ゴンクールの日記』の読者であり，それは『見出された時』（1927 年刊）のパスティシュでも分かるが，1922 年 5 月 27 日のゴーロワ紙発表の，プルーストの，『失われた時を求めて』の第 2 巻『花咲く乙女たちのかげに』でのゴンクール賞受賞に関しての文章[3] にも，若き日にサロンで見かけたエドモン・ド・ゴンクールの気高い姿の描写や，少年時代に戯曲版の『ジェルミニー・ラセルトゥ』を観に行き，目を泣きはらした思い出の描写などが印象的であることからも，ゴンクール文学の愛好家振りが窺えるのである。そうして何よりも，その記事の中で，プルーストは決定的なゴンクール愛を披歴している点は強調されなければならない。即ち，ゴンクールの「創意工夫に満ちた文体」を，プルーストが『パスティシュとメランジェ』（1919 年刊）及び『失われた時を求めて』の中でパスティシュしたのは，「結局のところ，称賛を込めた批評なのだ[4]」，と明言している事である。こうして見て来ると，憧れのグレフュール伯爵夫人の望みを，敬愛するゴンクールに代わって自らが満たす，この様な考えがプルーストに生じたと考えるのは，自然の勢いであろう。

ところで，何故プルーストはその大長編小説の最終巻『見出された時』に自身の「これから

3） Marcel Proust, *Essais et articles*, Paris, Gallimard, p. 337-339.

4） Voir *Ibid.*, p. 338 : « Le style plein de trouvailles n'est pas, comme l'a dit selon moi à tort Daniel Halévy, d'un mauvais artisan de la langue française. De ce style j'aurais trop à parler en l'analysant. Par la synthèse j'en ai fait du reste la critique — critique laudative en somme — dans mes *Pastiches et Mélangés* et surtout dans un des volumes à paraître de *La Recherches du temps perdu*, où mon héros se retrouvant à Tansonville y lit un pseudo-inédit de Goncourt où les différents personnages de mon roman sont appréciés. »

書く小説」の文学論を記したのであったか。ここで特記しておきたい。ゴンクールは自身の著作に多く，文学宣言を序として付した文豪であったことを。そうしてそれらを『文学宣言序文集[5)]』として纏めて刊行したことも。プルーストは「これから書く小説」の「冒頭」に，この「文学宣言序文」を付したのだ。『ゴンクールの日記』のパスティシュ，この「文学宣言序文」，ここにプルーストのゴンクールに対する敬意と挑戦があるのだ。また『失われた時を求めて』はモデル小説でもあるが，十九世紀文学で「真実の小説（ロマン・ヴレ）」を標榜し，『ルネ・モプラン』（1864年刊）や『ジェルミニー・ラセルトゥ』（1865年刊），『ジェルヴェゼ夫人』（1869年刊）他，幾つもの鍵小説（ロマン・ア・クレ），即ちモデル小説の傑作をものしたのもゴンクールであった事はここで指摘されるべきだろう。『失われた時を求めて』はプルーストによる，先輩の作家にして上流社交人士たるゴンクールへの壮麗なオマージュなのである。では，ゴンクール，プルーストの二人を結び付ける当代社交界の名花グレフュール伯爵夫人の『ゴンクールの日記』中への登場の様子を確認した後，伯爵夫人から文豪への未刊行書簡を見て行く事にしよう。

『ゴンクールの日記』に描かれたグレフュール伯爵夫人

1888年12月19日（水）付の条。ゴンクールはグレフュール伯爵夫人から，素敵な羽の色調が日本風だとして，贈られた雉たちが，ドーデ提供の夕食時のテーブルに飾られている旨，描写している。この公爵夫人からゴンクールへの贈り物には，以下に見る1888年12月12日付の伯爵夫人の書簡が添えられていた。手紙1を参照。1890年2月17日（月）付の条。伯爵夫人が自らの胸像を彫刻家フランチェスキに作らせた旨，ゴンクールに語った事が記されている。1891年2月26日（木）付の条。プロシアの皇后がゴンクールを訪問する予定であったが，取りやめになった旨，速達で伯爵夫人からゴンクールに知らせが届いた事が記されている。以下に見る1823年2月23日付の伯爵夫人の書簡に対応する。手紙2を参照。1891年4月25日（土）付の条。前日の，伯爵夫人からの招きで，作家が夫人宅を訪ねると，夫人はゴンクールの小説に就いての社交界での毀誉褒貶に関して語った後，ゴンクールに当代の上流階級の社交界の婦人を主人公にした作品を描くべきだと提言する。また，伯爵夫人は，その5歳の娘が語った話を編んだ本を何時か見せたい旨，作家に告げる。1891年7月7日（火）付の条。モンテスキウ＝フザンサックをゴンクールが訪問。そこにグレフュール伯爵夫人が入って来る。ウドン作のディアナ像を知人から貰い受けることになった話を披露。フランス国立図書館が1892年付と推定する手紙にもこのウドン作のディアナの胸像が近く手元に届くとの内容が記されている。手紙16を参照。1891年11月25日（水）付の条。前日の話として，伯爵夫人から狩猟した許（ばか）りとて，ノロ（小型のシカ）が送られて来た旨記され，そのお礼かたがた，伯爵夫人依頼の，当代の上流社交婦人の小説は，高齢の事もあり，断念すとの返事を手紙で書いた

5） Edmond et Jules de Goncourt, *Préfaces et Manifestes littéraires*, Paris, Charpentier, 1888.

由も記される。

1892 年 3 月 1 日（火）付の条。前日の話として，ゴンクールが帰宅すると，十匹の兎の入った獲物の籠や，アザレ，マグノリア，蘭などの花の贈り物が届けられていたとの事。グレフュール伯爵夫人には古き時代の高貴な夫人の大らかさがあると記す。以下に見る伯爵夫人の 1892 年 2 月 29 日の書簡と対応。手紙 9 を参照。1892 年 5 月 14 日（土）付の条。伯爵夫人に請われて，夜九時から十一時まで，作家はグレフュール伯爵夫人宅を訪ねる。手紙に記されていたウドン作のディアーヌの胸像とゴンクールは対面する。更に，夫人の娘エレーヌの詩集を手に取り，夫人の従兄モンテスキウ＝フザンサックの詩や『ゴンクールの日記』に話題が及んだ。ウドン作のディアナ像に関しては，上記手紙 16 を参照。1893 年 1 月 4 日（水）付の条。ロベール・ド・モンテスキウがゴンクールを訪ね，彼の件でグレフュール伯爵夫人に作家が手紙[6] を書いた事に感謝した旨記される。1893 年 7 月 1 日（土）付の条。ある夕食会で，マティルド大公妃が嫉妬紛れに，夜会中，グレフュール伯爵夫人を酷評していた旨記される。1893 年 10 月 24 日（火）付の条。オペラ座のガラに出掛けると，グレフュール伯爵夫人が予告していた如く，参加者には軍服が目立った旨記される。1894 年 2 月 5 日（月）付の条。画家ポール・エルーがゴンクールに，グレフュール伯爵夫人がそのボワ＝ブドランにある宮殿に滞在の際，夫人を見て作成したクロッキーに就いて語る。寝起きの姿など，余りに私生活の姿が描かれており，画家の展覧会でのそれら百枚ほどのクロッキーの出展の希望を，伯爵夫人は拒絶したとの事。1894 年 5 月 30 日（水）付の条。マティルド大公妃邸の夕食会。モンテスキウの「ガーデンパーティー」が冗談半分で話題に。そこでのグレフュール伯爵夫人は，蘭が描かれたドレス姿で，一日中，顔を紗で覆った儘であったとの事。

1894 年 6 月 20 日（水）付の条。モンテスキウを伴って，グレフュール伯爵夫人を訪ねる。モンテスキウが伯爵夫人の文才を褒め称えると，伯爵夫人は謙遜しつつ，自身が書いた上流階級の社交婦人の生活を巡る著作を，モンテスキウが勧める様に世に問えば，スキャンダルの対象にも成り兼ねない事を伯爵夫人本人は語るも，出版に漕ぎ着けたい思いが溢れていた旨記される。ゴンクールはこの著作に興味を持ち，この段階では反対はしていない。1894 年 7 月 6 日（金）付の条。グレフュール伯爵夫人の小さな版の 6 冊からなるその著作が，ゴンクールの手元に届けられた旨記される。夫人がこれらの著書を出版したい意図を作家は汲み取る。その人生を巡る印象記の幾つかの箇所をゴンクールは引用している。「初めての接吻」など思い出を振り返る散文詩風の作品や，「無関心」，「儚(はかな)さ」[7] をテーマにした文章など，『ゴンクールの

6） Voir Pierre-Jean Dufief, « Correspondance Goncourt-Montesquiou », *Cahiers Edmond et Jules de Goncourt*, 1999, n° 7, p. 79. ゴンクールは 1892 年末の日付の伯爵夫人への書簡で，伯爵夫人に詩人であるモンテスキウに，文壇内での批評を余り気にしない様，伝えて欲しいと告げている。

7） « indifférence », « indifférentes », « fugitives » と云った，プルーストの小説のタイトルや内容と関連のある名詞や形容詞が見られる。プルーストが 1896 年に雑誌『現代生活』（*La Vie contemporaine*）

日記』の読者プルーストの後の創作に影響したかと思わせる内容が散見される。伯爵夫人の1894年7月6日付書簡は上記著作に付されていた物と考えられる。以下に見る手紙18参照。1894年8月8日（水）付の条。上記の著作に就き，ゴンクールが伯爵夫人に手紙で返事をした旨記される。著作の内容は興味深いが，伯爵夫人の社交界での成功を妬む人たちの攻撃の対象に成り兼ねないと伝える。作家は伯爵夫人がこれでも出版を諦められないのではないかと危惧している。1894年11月11日（日）付の条。ゴンクール邸のサロン「グルニエ」（屋根裏部屋の意）で，モンテスキウが作家を隅に連れて行き，伯爵夫人がゴンクールの返事の手紙を，その美しさを褒めていたというので，作家は，モンテスキウを押し返し，あの出版を断念させたい手紙で，本当は，伯爵夫人が気分を害したのではないかと問うと，モンテスキウは韜晦してしまうのだった。

1895年7月28日（日）付の条。日本美術研究の協力者でもある友人の美術商林忠正が帰ったすぐ後に，グレフュール伯爵夫がゴンクールの書斎を訪問。婦人科医ペアン医師の手術を芸術的だと皮肉交じりに絶賛し，ジグザグ運転が夢見心地にさせるとその自転車に夢中になっていることを披歴する。また着飾った本人の写真を持ち出し，これを基にフェリクス・ブラクモンに版画を制作してもらえる様，作家に仲介の労を請うた。1895年8月15日（木）付の条。モンテスキウがゴンクール邸を訪問。氏のお抱えの日本人庭師[8]に就いて語る。元々，グレフュール伯爵夫人お抱えの庭師であったが，三年の間，食事係が毎朝殺した兎を料理に出す為，それに嫌気が差して，そこを去りモンテスキウの庭師に鞍替えしたとの事。この庭師は現代語の金言を駆使してフランス語を話し，また日本庭園は物を寄せ集めて作らない点で，フランス式庭園の対極に位置付けているとの事。また，モンテスキウは自身の書いた宝石に就いての本に就いて話し，グレフュール伯爵夫人がその信奉者リットン卿から彫刻された石を貰うも，何か感じる所があり，とある占星術師の所に持って行くと，リットン卿がそうであった様に，所有していると死が軈て訪れると聞いて，伯爵夫人はすぐにセーヌ川にまで馬車を馳せさせ，それを捨てたというエピソードも。その後も，ユーゴーの話，フランスの女流詩人デボルド＝ヴァルモール，自分自身の事など，大量の記憶と共に語ったと云う。1895年10月16日（水）付の条。二カ月間に渡る田舎での静養を終えたブラクモンが，グレフュール伯爵夫人から注文

に発表した小説『つれない人』もしくは『無関心な男』（*L'Indifférent*）や，『失われた時を求めて』の第6巻，1925年刊の『消え去ったアルベルティーヌ』（*Albertine disparue*）のもう一つのタイトル『逃げ去る女』（*La Fugitive*）が想起される。

8）畑和助（はたわすけ，1865-1928）。鈴木順二氏の研究により，広くその存在が知らしめられたベル・エポックのパリで活躍した日本人庭師。前記生年月日に関する詳しい調査も氏によってなされた。鈴木順二「フランスに渡った邦人庭師―畑　和助の軌跡（上）」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』2009年，第49･50号，189-210頁，「フランスに渡った邦人庭師―畑　和助の軌跡（下）」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』2011年，第52号，53-82頁参照。特に，畑の生年月日に関しては「（上）」の193頁，「（下）」の55-56頁を参照のこと。

を受けた，彼女の写真を基にして制作することになったエッチングに関して，ゴンクールに話をする為に訪ねて来た。1896 年 2 月 29 日（土）付の条。ゴンクール兄弟共作の同名小説の，エドモンによる戯曲化作品『マネット・サロモン』（1896 年刊）の初回上演に作者エドモンも観劇に出向く。大入りの盛況。劇場では，エドモンの許へモンテスキウが訪れ，グレフュール伯爵夫人の名代で作家への祝辞を伝えた。1896 年 5 月 25 日（月）付の条。『ゴンクールの日記』の 1894 年 2 月 5 日（月）付の条で言及されている，画家エルーが描いたグレフュール伯爵夫人のクロッキーの発表を，伯爵夫人が拒絶した件の後日談。ゴンクールが，ベルシャス街のアルフォンス・ドーデ夫人を訪ねたところ，「グレフュール伯爵の証人になるのをお受けしましたか」と訊かれる。ゴンクールが何の事か判然しない旨返すと，伯爵が不在の或る日，伯爵の知らぬ間にそれらのクロッキーがなされた事に就いてだという。ゴンクールはその事に就いては何も知らなかったと言い，それらのクロッキーは伯爵承認の元になされていたと思っていた旨伝える。

それでは以下に，フランス国立図書館所蔵の書簡を見て行く事としよう。ゴンクールの家を初めて訪問した時の感動の記述に始まり，日本人庭師畑和助の紹介，グレフュール伯爵夫人が主宰する音楽協会の事，娘エレーヌ，従兄モンテスキウ，そしてまた自身の作品を巡って展開する文学熱等々，興味深い数々の話題の底に常に感じられるのは，大貴族の夫人から当代欧米の文藝思潮をリードしたフランスが生んだ文豪に対する限りない敬意である。

グレフュール伯爵夫人からエドモン・ド・ゴンクールへの手紙

1

1888 年 12 月 12 日

親愛なる先生，

少々日本を思わせる色調のこれらの雉たちが先生のお気に召しますならば光栄です。この様な思いが極まり，これらを先生にお送り致しました。先生のお宅をお訪ねして以来，長い間心に念じつつ，遂にそれを成し遂げたものごとに感じるあの限りない魅力に憑りつかれております。初めてであったにも不拘（かかわらず），「先生に再びお目に掛かった」といった印象を得ましたのは，先生のご親切のお蔭です。そしてあの時間の思い出は私（わたくし）にとりまして，掛け替えのないもので御座居ます。

敬具

シメイ，グレフュール伯爵夫人

2

1891 年 2 月 23 日

親愛なる先生,

思い掛けない出来事の所為で，大変遺憾では御座居ますが，人より依頼されて先生にお伝え致して居りました計画が実施出来なくなりました旨，ご報告申し上げることとなりました。先生の作品がとても有名で評価の高いものである丈に，愈々以て残念でなりません。

あと，このことは，絶対内密にして頂きとう存じます。

思えば，先生は私をご自宅で，皇后の様にお迎えくださいましたね，だって先生ご自身で通り迄下りて来てくださり，あの「名高い屋根裏部屋（グルニエ）」へと私をお通しくださったのですもの。

近く，郵便で日本の花を受け取ることになっていますが，畑（はた）が先生の元にそれらをお届けすることになって居ります。

敬具

グレフュール伯爵夫人

3

1891 年 2 月 23 日

親愛なる先生,

今晩になったら漸く，昨日，私たちがお会いし，話し合ったことが知れ渡ることでしょう。明日にでも，先生のお手元に通知が届くかと思います。先生の筆になる，かの面談の美しい描写を私は味わいとう存じます……後ほど。「在り来たりの思想」を受け付けない先生の様な方のご面前で，出来事をお話し致しますのは，興をそそる行為です。皇后様が，先生のお宅をご訪問なさり，そのご人格に先生が魅了せられた事は，ルナン氏には勘付かれない様，お気を付けあそばせ。

先生に自分のアイデアを取られた，などと言い出し兼ねません。（十分起こり得ることです。）

今回に限っては，先生に誰も文句は言えない事でしょう。

敬具

カラマン＝シメイ＝グレフュール

先生のお望みの際に，畑を行かせますが，先生のお宅に相応しくない代物などにはならない筈です。

4

1891年4月12日

親愛なる先生,

先生のご自宅に畑を，彼の意匠を凝らした植物と共に，遣わせます。

畑は，ここ数日間，私の従兄ド・モンテスキウの庭仕事の為にパリに滞在の予定です。

先生の方で，畑にご所望の事など御座居ましたら，ご都合に沿う様，申し伝えます。（畑は午前中，並びに午後，出勤可能です。）

畑は，三日月形の窓を配した，とても素敵な東屋（あずまや）を作る事が出来ます。先生が，お庭の為にそれをご所望で御座居ましたら，私，竹を捜し出す事も出来ます。畑はそれらの竹を，植物を縄状にした物で結わえるのです。

先生，22日，もしくは24日か25日にでも，お出で頂く事は出来ますかしら。

敬具

カラマン＝シメイ＝グレフュール

追伸

私，ゆっくりと味わい乍ら，先生の『日記』を耽読致して居ります。

5

1891年6月2日

我が親愛なる先生,

明日（みょうにち），私はトロカデロで，「エジプトの災い[9]」を主題とした回顧的哀歌を聴きに来る五千人の方々を，お迎えする事になっております！！

先生には私から「フランス語版の楽譜」をお送り致しますが，それは才能溢れる若い作曲家によってなされた翻訳で，先生にお勧め致します。是非お納め頂きたいこの譜面を，先生が見てくださって居る姿を思うのは，どれほど幸せな事でしょう。

9）『旧約聖書』は「出エジプト記」内のエピソード。

十六番のボックス席で，幕間に先生にお目に掛かれる光栄に預かりとう存じます。

敬具

グレフュール伯爵夫人

6

（1891）

親愛なる先生，

木曜の夜九時にお出で頂くと云うので如何でしょうか。

一日千秋の思いでお返事，お待ち申し上げて居ります。

カラマン・シメイ，グレフュール伯爵夫人

7

1892 年 1 月 3 日

親愛なる先生，

ベルリオーズの「恐怖」を再び舞台に上げる事に尽力し始めてから早一年が過ぎました。昨日は，思い掛けず最終のリハーサルを聴く事が出来ましたが，好評を博すものと信じますが，本作は，フランス国民が二十五年前には欲さなかった訳ですが，昨日はと云えば，拍手喝采で迎えられて居りました。これには驚く程のことも御座居ません，と申しますのも，この楽譜は音楽的洗練の白眉で満たされて居り，また，美なるドイツ芸術のみを鑑賞の対象として居る人々にはお気に召さないでしょうが，そこには独特な美質を有するあのフランスの芸術が截然と存在感を示して居ります。

舞台稽古に関しましては，午後一時[X]，或いは木曜夜八時に，先生には私のボックス席にお越し頂けましたなら最適かと存じますが，ご支援などを頂いているカルノー氏[10)]が臨席し，正に厳粛な雰囲気に包まれるものと思われます。

先生のお返事をお待ち申し上げますが，お受け頂けますならば，私自身，現代の様な時代に

10） マリー＝フランソワ＝サディ・カルノー（Marie-François-Sadi Carnot, 1837–1894），フランス第三共和政第四代大統領（1887–1894）。

こそオペラを提供し度いと，この小さな音楽協会を創設致しましたものですから，本当に嬉しく存じます。

敬具

カラマン＝シメイ＝グレフュール

[x] オペラ・コミック座

8

1892年1月

親愛なる先生，

先生のお便りがパリに届きました時分，私は彼の地に居らず，最近戻りまして，拝受致しました。と云う訳でして，お手紙が封じ込めて居りました気品は最近になって漸く辺りに広がりました。

先生が私に仰られて居られる事に私が値するなら何れほど誇らしい事でしょう。

私どもは火曜日に『ジェルミニー・ラセルトゥ[11)]』の再演を観に行く予定ですが，もし先生もお越しでしたら，暫し一階の何れかの特別ボックス席にお出でくださいませ。そこには，敵などは見つけられませんことよ。

敬具

カラマン＝シメイ＝グレフュール

9

1892年2月29日

親愛なる先生，

マグノリアをお贈り致します。親切にも私たちのアパートメントの高さにまで伸びて来まし

11） ゴンクール兄弟の小説の代表作『ジェルミニー・ラセルトゥ』を，弟の没後，兄エドモンが戯曲化した作品。1888年12月にパリのオデオン座で初演。『ゴンクールの日記』の1892年1月18日の条には，本戯曲がオデオン座で，十五回に渡り再演される旨，レコー・ド・パリ紙上に発表された事が記されている。

て，花も咲いたし，自家(うち)の中へと屹度，入り度がっているのねと思わせ，木々の先に花を突き出している様子は，打ち上げ花火を思い出させもしました。

『ジェルミニー・ラセルトゥ』を観る事が出来なかったのは，返す返すも残念では御座居ますが，先生の『日記』の最新刊をお送りくださった事には感謝の言葉も御座居ません。これこそ，「真の現実」に関する，生きた歴史なのであり，何の不都合をも含んで居りません。

これこそが，残り続ける現代の姿なのであり，それはこれらの記述が心臓の鼓動を伝えるものであり，生き生きとした物事は永遠に各時代の生者の関心を引き付ける事になるからなのです。

先生のお名前を，今年，ウィーンで開催される，「演劇と音楽に関する」博覧会の為に私が組織致しましたフランス協会の為にお貸し頂く訳には参りませんでしょうか。先生には一切，義務は生じません。演劇並びに音楽の歴史に属する某かの品（絵画，彫刻，楽譜，楽器）を選んで送ることが出来ます。

敬具

カラマン＝シメイ，グレフュール伯爵夫人

興味をおそそりしそうな蘭，綺麗な色合いのアザレを一輪ずつ，小包にお入れ致しておきます。

10

1892 年 5 月

先生，このエレーヌの「詩集」の中から，お好きな詩をお選び頂けますか。

カラマン＝シメイ＝グレフュール

小さな女流詩人は，貴重な先生の真筆に限りなく満足することでしょう。

11

1892 年 5 月

親愛なる先生，

お返事は未だ頂けていませんが，もし先生が，先生の「熱烈な礼賛者」の一人であるラル

フ・ワームリー・カーティス[12]氏をお迎え頂ける様でしたら，氏は「水曜日」にパッシーの先生のご自宅の戸をノックすることになっております。

氏は日本から帰って来たところです。

敬具

グレフュール伯爵夫人

12

1892年5月15日

親愛なる先生，

昨夜，先生から頂きました生活の実感溢れる美しい書物に就いて，何の様にしたら，先生に感謝のお気持ちを十分に伝えられることでしょう。十年前，先生の精神に私が触れる機会を得ましたのは，『ポンパドゥール夫人[13]』のお蔭で御座居ました。友情の証として先生が私にくださった夫人の物語こそが，その作者である先生への私の崇拝を確固たるものにしていたのです。

それ以来，先生がご著書を献ずる1892年現在の人々の中に私を数えてくださるのは，「この上ない喜び」です！　ところで，未来の世紀の学識豊かな人々が私を偲びつつ，何かしらの考察をする際，混乱を避ける為に，私の姓（カラマン＝シメイ）に「日付」を添えてお示し頂く事で，「何(ど)の」グレフュール伯爵夫人に献じられているのかを明確にして頂きたいので，私は先生の元にこの献辞をまたお持ち致したく思います。

お分かりの事と存じますが，先生にその様にして頂くことに，私は誇りと自負を感じて居るのです。

私の幼い娘の作の「瑪瑙の獅子」をご同封致しましたので，お読み頂き，火曜日にそれをまた取りに参らせます，と申しますのも，本作が，先生にお読み頂く為，娘に作らせる完成作の原型になるからです。この神秘的な雰囲気は先生のお気に召すものと確信申し上げてお送り致します。

この詩に，先生が散文，とお呼びになる作も付けておきます。散文の方は，今朝，田舎から届いた手元の狩の獲物の籠の様な形が目に付きますけれども。幼いエレーヌ[14]は，そこに卵のバスケットを加えたがって居るのですが（実に可愛い雌鶏たちから産み落とされた卵ですね）。

12）Ralph Wormeley Curtis (1854–1922). 米国出身で，主にヨーロッパの風俗を描いた画家。

13）Edmond et Jules de Goncourt, *Madame de Pompadour*, Paris, Charpentier, 1878.

14）エレーヌからエドモン・ド・ゴンクールに宛てられた手紙が2通，フランス国立図書館に収められている。何れも自作の詩に関するものである。BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 295–297.

先生，また近いうちに。昨夜は，有難う御座居ました。

カラマン＝シメイ，グレフュール伯爵夫人

13

1892年8月11日

先生，

ロワイヤ[15]から戻った時点で，パリで先生にお会いしたく存じておりましたが，運勢がそれを望まず，十日後に漸く先生がお戻りになられる旨，お伺い致しました。以下に，先生にお伝え致したかった事を簡単にお記し致します。私の従兄ロベール・ド・モンテスキウの書物に就いてまだ一つも文芸批評が発表されておらず，それはその本がまだ流通していないからという事も御座居ますが，「先生のみ」がこの本に就いて，「先生式」に先陣を切って，語ることが出来るでしょうと云う考えがとても激しく私の精神を支配したものですから，その旨，先生にお知らせ致し度くなった次第で御座居ます。

先生の作品に対する従兄の心からの称賛，それに「全てを集めれば」，数え上げるのに長く掛かり過ぎる「理由」に照らせば，“そうなるのが当然と言えましょう”……。

詩人たちの良し悪しを判断するのは，私の仕事ではありませんよ！と先生は私にご反論なさる事でしょう[16]……。或いは，それだからこそ余計に興味深いとも言えましょう。恐らく，レコー・ド・パリ紙上での先生の記事の中の一つでと云う事になりましょうか。つい最近，先生のお名前を紙面冒頭でお見掛けしたのが縁で，私は本誌の購読を始めました。さあ，親愛なる先生，一購読者のこの願いを叶えてくださいませ。素敵な主題に就いて執筆するのは先生のお役目です。誰も手を付けない前に，その名誉がまた先生に齎されるのです。九月に先生にお会い出来，“瑪瑙の本”を先生にお渡し出来れば良いなあと思って居ります。

敬具

カラマン＝シメイ，グレフュール伯爵夫人

15）　フランス中部オーヴェルニュ地方の中心都市クレルモン＝フェラン南西郊の湯治場。

16）　実際，ゴンクールは伯爵夫人への1892年8月15日月曜日付の書簡で，自身がこれまで韻文の批評をものしてこなかったことを理由に断っている。以上の書簡は，ピエール＝ジャン・デュフィエフ氏の研究で公表された。Voir Pierre-Jean Dufief, « Correspondance Goncourt-Montesquiou », *Cahiers Edmond et Jules de Goncourt*, 1999, n° 7, p. 78.

14

1892 年 12 月 10 日

親愛なる先生,

同封致しましたのは,「先生のお名前」をお見掛けした事で私が予約購読致して居ります新聞内の記事（作者に就いては，私，存じ上げません）で御座居ます。これらの詩行は「余りに少ししか語らず」して,「言い過ぎ」（書物を論じるには少なすぎる一葉で）だと私には思われます。

どの様に理解し，ご対応なさるかは先生のご感情にお任せ致します。

厳しい天候の折柄，先生が恙なくお過ごしである事をお祈り申し上げて居ります。

フローベールの書簡集を購入し，氏から先生へのお手紙を楽しく読んで居ります。

目下，私が勉強致して居ります物は，先生には，何だかお分かりかしら。天文学ですの。恥ずかし乍ら，この学問に関しては目に一丁字なしと，お打ち明け申し上げますわ。この学問は称賛に値するもので，私,「星への」願いを以て，没頭致して居ります。あれら天体の輝かしい活動と，私たちによる生きる為の微「調整」の比較は，嫌な事同士を天秤に掛けて比べる際の慰めと似ています。この研究は，不快事の小ささを際立たせてくれ，別の観点でそれらに就いて私たちに考えさせて呉れます。この学問と先生の芸術を対比してみるのも好奇心をそそる様に感じます。

私たちは，無限なるものと対等に向かい合う為に，思考力を持っているのですわね。

敬具

カラマン＝シメイ＝グレフュール

追伸

ところで，近く『シャルル・ドゥマイユ[17]』と『進歩を倒せ！[18]』を入手致しますが，後者の表題の弁護人たる先生にお会い出来ますのが待ち遠しくてなりません。私は，最近の発明品を，あれこれと楽しんで居りますものですから！

17） Paul Alexis et Oscar Méténier, *Charles Demailly*, Paris, Charpentier et Fasquelle, 1893. ゴンクール兄弟の同名小説の戯曲化作品。5 幕物。1892 年末から 1893 年初頭に掛けてパリのジムナーズ座にて上演された。

18） Edmond de Goncourt, *À bas le progrès*, Paris, Charpentier et Fasquelle, 1893. 十九世紀に流行した「進歩思想」を皮肉った，エドモンの手になる一幕物の軽喜劇。1893 年 1 月 16 日（月），パリで初演。

15

（1892 年）

また，私で御座います。今朝の先生の新聞の，或る記事に文句を申し上げとう存じます。「恨みの籠った」，敬意に欠けた，「サヤインゲン[19]」というタイトルの記事で，恐らく「続き物」になる旨，予告している模様です。

一体，詩人を名乗る「レティフなる匿名の下」に隠れている人物は，何方（どなた）なのでしょう[20]。

16

（1892 年）

何時かサロンで「桜桃狩り」をしとう存じます。創作家の目先を変える為です。

先生，木曜日，もしくは土曜の晩の九時から十一時の間に，私に会いにお出でくださいませ。炉端で，お喋り致しましょう。

ウドン作の，ディアナの見事な胸像を最近入手致しまして，先生とディアナのご対面を目に致しますのが本当に楽しみなのです。

17

1893 年 5 月 31 日

親愛なる先生，

「瑪瑙の本」を先生にお届けに上がる事が出来ず，また一月前に落手致しました美麗な文体の『十八世紀の恋愛[21]』に就いてのお礼も叶いませんでした。「流行の」恐ろしい病によって，すっかり勇気を挫かれ，引っ込み思案にさせられて居ります。ですが，『ギマール嬢[22]』は手元

19） 記事の参照先は，後述の本書簡の原文の註を見られたい。

20） ピエール＝ジャン・デュフィエフ氏の研究に拠れば，レティフを名乗る作者はジャン・ロランだとゴンクールはグレフュ―ル伯爵夫人への手紙（1892 年 12 月末の日付）で告げている。またそこで作家は伯爵夫人とモンテスキウに，文壇での批評に感じすぎないように諭してもいる。詳しくは，後述の本書簡の原文の註を参照のこと。

21） Edmond et Jules de Goncourt, *L'Amour du XVIIIe siècle*, Paris, Dentu, 1875.

22） Edmond de Goncourt, *La Guimard*, Paris, Charpentier, 1893.

にあり，お礼申し上げます。夫が彼女に向けて送った詩は，最後の色事師の手になるものと言えましょう……。そのうちに，パッシーに出向ける位に，十分良い体調になりたいものですが，年に一度のご訪問の機会が待ち遠しくて仕方御座いません。

敬具

カラマン＝シメイ＝グレフュール

18

1894年7月6日

親愛なる先生，五冊の本を同封致しました。先生は，私の従兄ロベール・ド・モンテスキウを除けば唯一の，作者が誰かをご存じの方です。

先生からご感想の要点をお伺い出来ましたら，私，大変嬉しゅう御座居ますし，またもしこれらの短い「心の在り様」に幾何（いくばく）かのご関心を抱いてくださいましたなら，「誰か他の女性」にでもその点を告げるが如くに，私に仰って頂けましたら光栄で御座居ます。

先生にお送り致します五冊は「一部ずつ」しか御座居ませんものですから，後ほど私まで送り返して頂きとう存じます。先生用の写しを作りますから。

これらの本は，各々五部ずつ，田舎の私どもの小さな印刷機で刷られ製本される予定です。

私の大望の中の一つは，私のものする「何やら良く分からない物」が，「現代文学の父」たる先生の血管内に流れる血脈を少しでも継いでいる事を，先生にお認め頂くことで御座居ます。

敬具

カラマン＝シメイ，グレフュール伯爵夫人

19

1894年

親愛なる先生，

かくも素敵な方法で，私の事を思い遣りくださった事に就きまして，感謝の言葉も御座居ません。それ故に先生の御著書『過ぎし日のイタリア[23)]』は，その綺麗な献辞とも相俟って，先

23） Edmond et Jules de Goncourt, *L'Italie d'hier, notes de voyage 1855–1856*, Paris, Charpentier et Fasquelle, 1894.

生の全ての御著作の中でも，特に大切な物となっております。私は，つい先頃，田舎から戻って参りまして，沢山する事が御座居ましたが，その中には，私たちの偉人エミール・オジエ[24]やグノー[25]の像の為の台座の件も含まれて居ります。何れかの水曜日に，先生にお目に掛かりに参りたく存じますが，再会出来ます事が本当に楽しみです。

感謝と親愛の情を籠めまして。

カラマン＝シメイ＝グレフュール

計画致して居ります事は，「とても」良くありがちな感じにする積りです。

20

1894 年 11 月 15 日

親愛なるゴンクール先生，

最近，私の従兄のド・モンテスキウに会いましたが，先生の御体調が大変宜しい旨，私に申して居りましたが，本当に嬉しゅう御座居ました。そして，あの黄色い綺麗な薔薇を先生から頂き，感動致しました日の思い出が，私を，今年の夏の庭巡りへと連れ戻しました。

ナシオナル出版社の社長（またムラン市財務局長）のド・イリヤルト氏は，『娼婦エリザ[26]』に使う挿絵に就いて先生にお話しし度い意思を私に告げて居られましたので，私は氏に，この件に関しては，先生からご助言を授かるよう強く勧めておきましたが，それは概して，その部署の人々が決めた挿画には余り良くない物もあるからなのです。

先生が日時を私にご指定頂けましたら，氏は喜んでこの件に就き，ご面会に上がるとの事です。

先生は，もし誰よりも無意識にであっても，先生の着想に最も接近し得る画家を，氏に指摘出来る方です。

敬具

グレフュール伯爵夫人

24） Émile Augier (1820–1889)，フランスの劇作家。

25） Charles-François Gounod (1818–1893)，フランスの作曲家。

26） Edmond de Goncourt, *La Fille Élisa*, Paris, Librairie de l'Édition Nationale, 1895. ピエール＝ジョルジュ・ジャンニオ（Pierre-Georges Jeanniot, 1848–1934）が挿絵を担当した。『娼婦エリザ』の初版は 1877 年，シャルパンティエ書店から出版された。

ナシオナル出版は，最近，ヴィクトル・ユーゴーの作品を仕上げました。

21

親愛なるゴンクール先生，

本日，日曜の五時頃ですが，パリを只管縦断致しまして，運が良ければ先生にお会い出来るのではないかと思いまして，一か八かで先生の御自宅の入り口まで参りました。

先生が『日記』の最新巻[27]の中で，私の姿の輝かしく，味わい深い一瞬をお切り取りくださって居られる事へのお礼を申し述べるのが楽しみです。

敬具

カラマン＝シメイ＝グレフュール

1895年7月28日

22

親愛なる先生，

当地で印刷致しましたこの思い出に纏わる随筆を先生にお届け致しますが，全ては私の受けた特異な厳しい躾に起因する内容です。書いている本人たち以外は関心が持てない書簡類等は，無理には読まないでください。お送り致しました本は，単に或る種の生硬さの所為ですが，概して子供っぽい本当らしさがあり，先生を微笑させてしまうかも知れません。例えば，甘草の葉の形をした目を持つ幽霊の描写等ですが，全ては忠実に私の記憶に由来している物です。

先生の御自宅で，先生がその頃，執筆なさっていた玉稿の近くで，先生のお考えに具に接しつつ過ごした時間はとても仕合せでした。

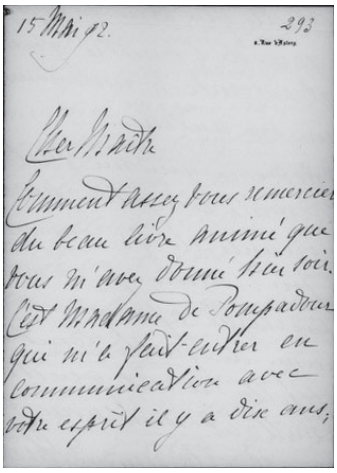
先生の御恩に感謝致して居ります。

敬具

カラマン＝シメイ＝グレフュール

1895年10月16日

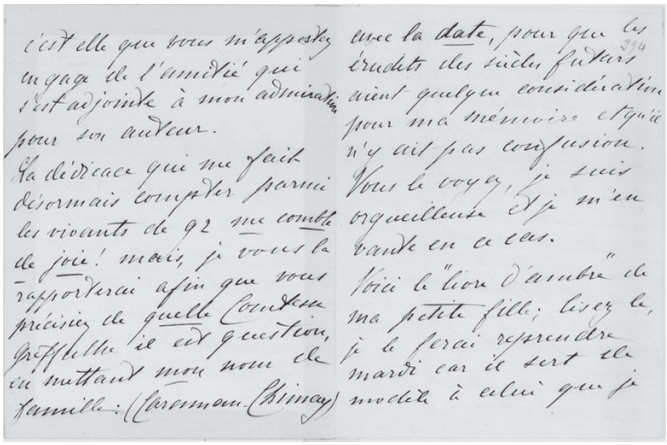
27） 1895年5月8日刊の，『ゴンクールの日記』第8巻を指すものと思われる。第8巻は，1889年から1891年までの日付の記述から成る。



15 Mai 92. 293

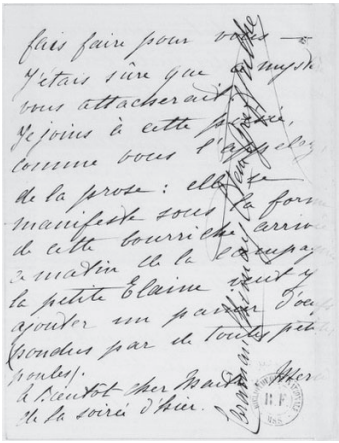
Cher Maître

Comment assez vous remercier du beau livre animé que vous m'avez donné l'an soir. C'est Madame de Pompadour qui m'a fait entrer en communication avec votre esprit il y a dix ans;



c'est elle que vous m'apposez en gage de l'amitié qui s'est adjointe à mon admiration pour son auteur.
La dédicace qui me fait désormais compter parmi les vivants de 92 me comble de joie! mais, je vous la rapporterai afin que vous précisiez de quelle Comtesse Greffulhe il est question, en mettant mon nom de famille: (Caumont Bizy)

avec la date, pour que les érudits des siècles futurs aient quelque considération pour ma mémoire et qu'il n'y ait pas confusion.
Vous le voyez, je suis orgueilleuse et je m'en vante en ce cas.
Voici le "lion d'ambre" de ma petite fille; lisez le, je le ferai reprendre mardi car il sert de modèle à celui que je



fais faire pour vous — J'étais sûre que vous vous attacheriez. Je joins à cette lettre, comme vous l'exigez, de la prose: elle se manifeste sous la forme de cette bourriche arrivée ce matin et la petite Claire veut y ajouter un panier d'oeufs pondus par de toutes petites poules.
A bientôt cher Maître et la soirée d'hier.

① BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 293, 294. グレフュール伯爵夫人の美しい筆跡。手紙の末尾で紙幅に詰まると，縦に書く癖がある。縦書きは，当時流行のジャポニスムの影響だろうか。

グレフュール伯爵夫人からエドモン・ド・ゴンクールへの書簡の原文

Lettres de la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

1. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

12 déc[embre]. [18]88[28] .

Cher Maître,

J'espère que les tons un peu japonais de ces faisans vous plairont. C'est cette pensée qui me fait

28） BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 272, 273. En-tête : Bois Boudran Nangis Seine & Marne.

vous les envoyer. J'ai gardé de ma visite chez vous ce charme infini qu'on épreuve à avoir pu exécuter une chose méditée depuis longtemps. Il m'a semblé grâce à votre amabilité « vous revoir » au lieu de venir pour la première fois ; le souvenir de cette heure est pour moi précieuse.

Croyez, cher Maître, à ma profonde admiration.

Chimay C[om]tesse Greffulhe

2. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

23 f[évrier] [18]91[29)]

Cher Maître,

À cause de choses imprévues, on me fait vous dire qu'à grand regret on est obligé de ne pas mettre le projet dont on m'avait priée de vous parler à exécution. Avec d'autant plus de regret que vos œuvres « étaient connues et appréciées ».

Il me reste à vous demander que ceci reste absolument entre nous.

Au fond, c'est moi qui ai été reçue comme une impératrice chez vous puisque vous êtes descendu dans la rue et m'avez fait pénétrer dans le « fameux grenier ». Je vais recevoir un envoi de fleurs du Japon et Hâ thâ vous les portera.

Croyez, cher Maître, à mes meilleurs sentiments.

La Comtesse Greffulhe

3. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

23 f[évrier] [18]91[30)]

Cher Maître,

On ne saura que ce soir notre entretien d'hier. Il est probable que vous recevez un avis demain.

29) Bnf., n.a.Fr. 22464, f°s 274, 275. En-tête : Bois Boudran Nangis Seine & Marne.

30) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 276, 277. En-tête : 8. Rue d'Astorg.

Je me réjouis d'une rencontre qui vous rendra de belles pages..... plus tard. Il est intéressant de présenter des évènements devant un œil tel que le vôtre même malgré votre manque « d'idées générales ». Prenez garde que M. Renan n'ait connaissance de la visite de Sa Majesté chez vous et qu'il ne vous sache sous le charme de sa personnalité. (ce qui arrivera certainement) Il dira que vous lui prenez ses idées.

Pour cette fois seulement, on vous le permettra.

Croyez, cher Maître, à tous mes sentiments d'admiration.

Caraman Chimay Greffulhe

Je vous enverrai Hâ-tha quand vous voudrez, ce ne sera pas un bibelot déplacé chez vous.

4. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

12 avril [18]91[31)]

Cher Maître,

Je vous envoie Hâ-ta avec des plantes de sa façon.

Il va rester ces jours-ci à Paris pour arranger le jardin de mon cousin de Montesquiou— Si vous avez quelque travail à lui faire faire, je le mets à votre disposition (Il pourrait venir matin et après-midi).

Il sait faire de ravissants kiosques avec des fenêtres en croissants de lune. Si vous en désirez pour votre jardin — je pourrais retrouver des bambous — il les coud avec une sorte de corde végétale. Voulez-vous venir me voir le 22 — le 24 ou 25 à 9 h[eure]s ½.

Croyez, cher Maître, à mes meilleurs sentiments.

Caraman Chimay Greffulhe

P.S.

Je m'abreuve lentement et avec délices de votre dossier *Journal*.

31) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 278, 279. En-tête : 8. Rue d'Astorg.

5. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

2 juin [18]91[32)]

Mon cher Maître,

J'attire demain cinq mille personnes au Trocadéro pour entendre des lamentations rétrospectives au sujet des plaies d'Égypte !! —

Je vous envoie la *partition française* dont je vous recommande la traduction faite par un jeune compositeur de talent. Combien je serais heureuse de vous voir suivre sur cette partition que je vous prie d'accepter.

J'espère avoir le plaisir de vous voir pendant l'entracte loge N° 16.

Croyez, cher Maître, mes meilleurs sentiments.

C[om]tesse Greffulhe

6. De la comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

1891[33)]

Cher Maître,

Voulez-vous venir me voir jeudi soir à 9 h[eur]s ?

J'attends impatiemment votre réponse.

Caraman Chimay C[om]tesse Greffulhe

7. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

3 j[anvier] [18]92[34)] .

Cher Maître,

32) BnF, n.a.Fr. 22464, f[os] 280, 281. En-tête : 8. Rue d'Astorg.

33) BnF, n.a.Fr. 22464, f° 282. En-tête : 8. Rue d'Astorg.

34) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 285, 286. En-tête : 8. Rue d'Astorg.

Voilà un an que je travaille à remettre à la scène « Les Frayeurs » de Berlioz — hier, j'ai été *incognito* entendre la répétition finale — ce sera, je crois, un succès. — Cette œuvre, dont *les Français* n'ont pas voulu, il y a 25 ans — a été acclamée hier — Ce n'est pas étonnant car cette partition est remplie de merveilles de délicatesse musicales et il s'agit bien là de cet art *français* qui a son mérite à part — n'en déplaise à ceux qui n'aiment que le bel art allemand.

Cela vous serait le plus agréable d'accepter ma loge pour répétition générale 1 heure de l'après-midi[x] ou de l'accepter pour jeudi soir *8 h[eure]s* qui sera la *vraie* solennité avec M. Carnot à l'appui etc. et etc.

J'attends votre réponse et je serai heureuse d'avoir votre approbation — ayant fondé moi-même cette petite société musicale à même aujourd'hui de donner des Opéras.

Croyez, cher Maître, à mes sentiments d'amitié.

Caraman Chimay Greffulhe

[x] Opéra comique

8. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

J[anvier] [18]92[35)]

Cher Maître,

Votre lettre est allée à Paris où je n'étais — et où je l'ai trouvée récemment. La grâce qu'elle renfermait vient de se répandre —

Combien je serais fier de mériter ce que vous me dites.

Nous allons mardi à la reprise de *Germinie Lacerteux*, si vous y êtes — venez un instant dans une des avant-scènes rez-de-chaussée.

Vous n'y trouverez pas d'ennemis.

Croyez, cher Maître, à tous mes sentiments d'admirations.

Caraman Chimay Greffulhe

35) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 287, 288. En-tête : Bois Boudran Nangis Seine & Marne.

9. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

29 fév[rier]. [18]92[36] .

Cher Maître,

Voici un Magnolia qui a eu la bonté de se mettre à la hauteur de nos appartements, sans doute pour témoigner de l'envie qu'il avait d'y entrer quand il fleurit, il lance ses fleurs au bout de ses bois comme des fusées de feu d'artifice.

J'ai été bien désappointée de ne pas voir *Germinie Lacerteux* mais, que de remercîment à vous adresser pour la mise en communication avec votre dernier journal : c'est de l'histoire vivante, sans aucun des inconvénients — de la *vraie réalité*.

C'est une actualité qui demeurera, parce qu'elle est frottée à des battements de cœur, et que les choses vives prendront éternellement les vivants.

Voulez-vous me donner *votre nom* pour le comité Français que je constitue en vie de l'exposition « du théâtre et de la musique » qui aura lieu à Vienne cette année —

Vous ne serez engagé à *aucune obligation*. On pourra envoyer facultativement un objet quelconque appartenant à l'histoire du théâtre et de la musique (Tableaux, gravures, partitions, instruments).

Croyez, cher Maître, à tous mes sentiments d'admiration.

Caraman Chimay C[om]tesse Greffulhe

Je joins au parquet ! une orchidée très curieuse paraît-il et une azalée de jolie nuance.

10. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

Mai [18]92[37] .

Voulez-vous, Monsieur, choisir dans ce « recueil d'Elaine » celle que vous péférez.

Caraman Chinay Greffulhe

36) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 289, 290. En-tête : Bois Boudran Nangis Seine & Marne.

37) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 291. En-tête : 8. Rue d'Astorg.

La petite poétesse est infiniment falattée du précieux autographe.

11. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

Mai [18]92[38)]

Cher Maître,

Si vous voulez bien recevoir M. Ralph Wormeley Curtis, un de vos *fervents admirateurs*, pas de réponse.

Il doit venir *Mercredi* à Passy *frapper* à votre porte.

Il revient du Japon.

Croyez, cher Maître, à mes meilleurs sentiments.

La Comtesse Greffulhe

12. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

15 mai [18]92[39)] .

Cher Maître,

Comment assez vous remercier du beau livre animé que vous m'avez donné hier soir. C'est *Madame de Pompadour* qui m'a fait entrer en communication avec votre esprit il y a dix ans ; c'est elle que vous m'apportez en gage de l'amitié qui s'est adjointe à mon admiration pour son auteur.

La dédicace qui me fait désormais compter parmi les vivants de 92 *me comble de joie* ! Mais, je vous la rapporterai afin que vous précisiez de *quelle* Comtesse Greffulhe il est question, en mettant mon nom de famille : (Caraman-Chimay) avec la *date*, pour que les érudits des siècles futurs aient quelque considération pour ma mémoire et qu'il n'y ait pas confusion.

Vous le voyez, je suis orgueilleuse et je m'en vante en ce cas.

Voici le "lion d'ambre" de ma petite fille, lisez-le, je le ferai reprendre mardi car il sert de

38) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 292. TÉLÉGRAMME 1605 Auteuil *M*onsieur Edmond de Goncourt 53 Bd Montmorency Passy Paris.

39) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 293, 294. En-tête : 8. Rue d'Astorg.

modèle à celui que je fais faire pour vous —

J'étais sûr que ce mystère vous attacherait.

Je joins à cette poésie, comme vous l'appelez de la prose : elle se manifeste sous la forme de cette bourriche arrivée ce matin de la campagne. La petite Elaine veut y ajouter un panier d'œufs (pondus par de toutes petites poules).

À bientôt, cher Maître. Merci.

Caraman Chimay C[om]tesse Greffulhe

13. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

11 août [18]92[40] .

Monsieur,

J'espérais vous voir à Paris à mon retour de Royat — le hasard ne l'a pas voulu — on m'a dit que vous ne seriez de retour que six jours plus tard — Voici en deux mots ce dont je voulais vous entretenir : aucune critique littéraire n'a encore paru sur le livre de mon cousin Robert de Montesquiou puisque ce livre n'est pas encore en circulation — l'idée que *vous seul* pourriez en parler le premier et « à votre façon » s'est imposée si violemment à mon esprit que j'ai voulu de vous en faire part.

L'admiration profonde qu'il a de votre œuvre — et *toutes les raisons réunies*, trop longues à énumérer font que « cela se devrait »……..

Vous allez me riposter que ce n'est pas votre métier que de juger les poètes[41] !... — autrement et ce sera d'autant plus intéressant — Un article de vous dans *L'Écho de Paris* peut-être — Je viens justement de m'y abonner à cause de votre nom que j'ai vu en tête. Allons, cher Maître, faites droit à cette demande d'une abonnée — À vous, un beau sujet — on vous en remet l'honneur avant que personne n'y touche. J'espère vous voir en septembre et vous offrir le « livre d'ambre ».

Croyez, à mes meilleurs souvenirs.

---

40) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 298, 299. En-tête : La Case Route de Pourville Dieppe, avec le dessin d'un château.

41) Edmond refuse sa demande. Voir Pierre-Jean Dufief, *op. cit.*, p. 78 : lettre qu'Edmond adressa à la comtesse Greffulhe à la date du lundi 15 août 1892.

Caraman Chimay C[om]tesse Greffulhe

14. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

10 déc[embre] [18]92[42] .

Cher Maître,

Voici un article (dont j'ignore l'auteur) qui a paru dans un journal auquel je me suis abonnée à cause de *votre nom*.

Il me semble que ces vers en *disent trop* (dans une feuille ou il n'a pas été *autrement* question de livre) vu qu'ils en disent *trop peu* !

Je vous laisse le soin d'apprécier et d'agir suivant votre sentiment.

J'espère que vous vous portez bien par un terrible temps —

J'ai acheté la correspondance de Flaubert et me réjouis de lire ses lettres à vous ——

J'étudie en ce moment, savez-vous quoi ? — l'astronomie, j'avoue à ma honte que je n'en connaissais pas le premier mot — Cette science est admirable et je m'y plonge avec une volupté « sidérale » : la comparaison victorieuse des splendides agissements de ses astres avec notre faible « arrangement » pour la vie est comme une consolation à opposer à la balance des ennuis — cette étude souligne leur petitesse et nous fait les [*sic*] considérer à un autre plan — Je songe qu'une confrontation de cette science avec votre art serait curieuse !

Nous avons pour égaler l'infini : la pensée.——

Croyez, cher Maître, à mes sentiments d'admiration.

Caraman Chimay Greffulhe

P.S.

Nous allons donc avoir *Charles Demailly* et *À bas le progrès*, je suis impatiente de vous voir l'avocat de ce dernier titre ; moi qui jouis tant des récentes inventions !

15. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

42) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 300, 301. En-tête : Bois Boudran Nangis Seine & Marne.

[1892[43]]

C'est encore moi – pour me plaindre d'un article *dans votre journal* de ce matin — article *Haineuse* – irrespectueux qui annonce probablement *une série* – intitulé – Haricot vert[44] –

Quel est donc la personne qui se cache « sous le pseudonyme de Raitif [»] et qui s'intitule « poète »—— .....

16. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

[1892[45]]

Pour faire la « cueille des cerises » dans un salon ——— détournement des vues du créateur.

Voulez-vous, Monsieur, venir me voir jeudi ou samedi soir entre 9 et onze heures – nous causons, au coin du feu.

Je viens de recevoir le beau buste de Houdon – Diane – et serai charmée de vous présenter l'un à l'autre.

17. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

31 Mai [18]93[46]

Cher Maître,

Je n'ai pu vous porter le livre d'ambre, ni vous remercier de la jolie écriture de *L'Amour du XVIIIe siècle* reçue il y a un mois – la terrible maladie à la mode ôte tout courge et *fait* désirer *faire*

43) BnF, n.a.Fr. 22464, f° 304. Carte de visite. Lettres imprimées : LA COMTESSE GREFFULHE.

44) Raitif de la Bretonne, « Fleurs de cauchemar, Haricot vert », *L'Écho de Paris*, 28 décembre 1892, p. 1–2. Raitif de la Bretonne est Jean Lorrain selon Edmond de Goncourt : voir Pierre-Jean Dufief, *op. cit.*, p. 79 : lettre qu'Edmond de Goncourt adressa à la comtesse Greffulhe, à la date de la fin décembre 1892. Par ailleurs, l'article de Raitif concernant Montesquiou dans *L'Écho de Paris* du mercredi 7 décembre 1892 : « Fleurs de rêve, Lunaire, pour le plus délicat des Esthètes » est conservé à la BnF : n.a,Fr. 22464, f° 303.

45) BnF, n.a.Fr. 22464, f° 305. Carte de visite. Lettres imprimées : LA COMTESSE GREFFULHE. La comtesse Greffulhe écrit en bas : 8 Rue d'Astorg.

46) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 306, 307. En-tête : 8, Rue d'Astorg.

« le mort ». J'ai pourtant la Mlle Guimard et vous en remercie – les vers que lui a adressés son mari sont de derniers galants..... J'espère être assez bien dans quelque temps pour aller à Passy – ma visite annuelle me manque beaucoup.

Croyez, cher Maître, à mes meilleurs sentiments de sympathie et d'admiration.

Caraman Chimay Greffulhe

18. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

6 Juillet [18]94[47)]

Voici, cher Maître, cinq petits livres – Vous serez *le seul* à connaître l'auteur avec mon cousin Robert de Montesquiou —

Je serais très heureuse que vous résumiez votre impression et que vous me disiez comme si vous le disiez à *une autre* si vous trouvez un intérêt quelconque à ces brefs « états d'âme » ——

Les cinq exemplaires que je vous envoie sont uniques, je vous demanderai donc de me les renvoyer — afin de les faire copier pour vous —

Ils sont tirés à cinq exemplaires chacun et imprimés par notre petit imprimeur de la campagne —

Une de mes ambitions serait que vous reconnaissiez à de certains « je ne sais quoi » un peu de sang qui coule dans vos veines de « Père de la littérature moderne ».

Croyez, cher maître, à mes meilleurs souvenirs et à mes bien affectueux sentiments d'admiration.

Caraman Chimay C[om]tesse Greffulhe

19. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

[18]94[48)]

Cher Maître,

---

47) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 308, 309. En-tête : 8, Rue d'Astorg.

48) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 310. TÉLÉGRAMME 5103 Auteuil *M*onsieur Edmond de Goncourt 53 Bd Montmorency Paris 6. 20. 94.

Combien je vous remercie d'avoir pensé à moi de *si belle façon* – Votre livre *d'Italie d'hier* en est précieux entre tous avec sa jolie dédicace – Je suis revenue depuis peu de la campagne et j'ai eu beaucoup à faire y compris des piédestaux pour nos grands hommes, Émile Augier et Gounod. Je viendrai vous voir un mercredi bien heureuse de vous revoir.

Pensées reconnaissantes et sympathiques.

Caraman Chimay Greffulhe.

Les dessins sont *bien* typiques.

20. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

15 Nov[embre]. [18]94[49)]

Cher Monsieur de Goncourt,

J'ai vu dernièrement mon cousin de Montesquiou qui m'a donné de très bonnes nouvelles de votre santé, ce qui m'a fait grand plaisir — et m'a reportée au tour de jardin de cet été, le jour où vous m'avez donné cette jolie rose jaune, émue. ——

M. de Yriarte qui est le directeur de la société de l'Édition Nationale (et le trésorier général des finances Melun) m'a dit son intention de vous parler d'une illustration pour *La Fille Elisa*, je l'ai fortement engagé à vous consulter à ce sujet, car je crains en général les illustrations provenant de la décision d'un comité ———

Il sera très heureux d'aller vous voir à ce sujet heures et jour que vous m'indiquerez. Vous saurez moins que personne, si telle est votre intention, lui désigner l'artiste qui s'approchera le plus de votre conception.

Croyez, mon cher Maître, à mes sentiments bien affectueux.

Caraman Chimay C[om]tesse Greffulhe

L'édition Nationale vient d'achever l'œuvre de Victor Hugo.

---

49) BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 311, 312. En-tête : Bois Boudran Nangis Seine & Marne.

21. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

Cher Monsieur de Goncourt,

Je ne fais que traverser Paris et je viens tenter le hasard à votre porte pour savoir si les augures peuvent permettre notre rencontre aujourd'hui Dimanche vers 5 h[eure]s.

Je serai heureux de vous remercier de l'exquise tranche de gloire que vous m'avez découpée dans votre dernier journal.

Croyez à mes affectueux sentiments et à mon admiration.

Caraman Chimay Greffulhe
28 juillet [18]95[50)]

22. De la Comtesse Greffulhe à Edmond de Goncourt

Cher Maître,

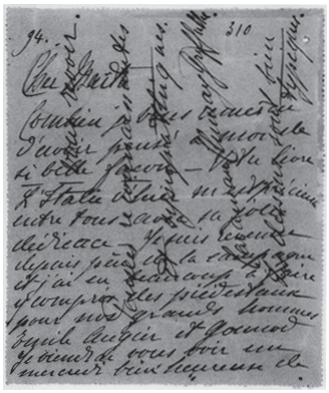
Je me permets de vous envoyer cet essai de souvenir imprimé ici, le tout venant du cru de mon dressage particulier ——— Ne vous fatiguez pas à lire les lettres qui n'ont d'intérêt que pour les auteurs – je vous envoie le livre uniquement à cause d'une certaine confiture de limaces qui peut-être vous fera sourire par son authenticité généralement enfantine ; ainsi que la description d'un fantôme à yeux de régisse – le tout retrouvé fidèlement dans ma mémoire.

J'ai été très heureuse de l'heure passée chez vous dans l'intimité de votre pensée à côté du manuscrit auquel vous travailliez alors – Je vous remercie de vous en être redevable et vous envoie mon affectueux souvenirs.

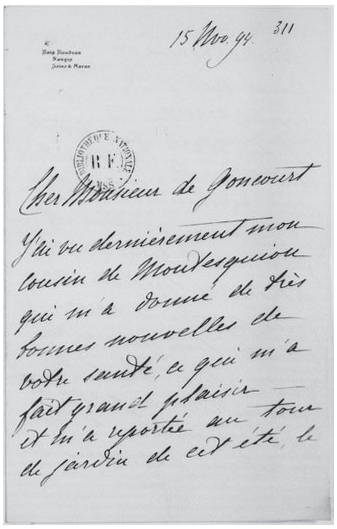
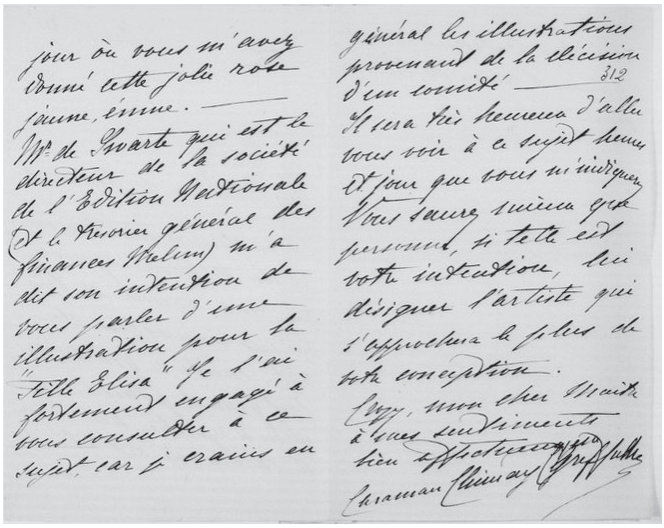
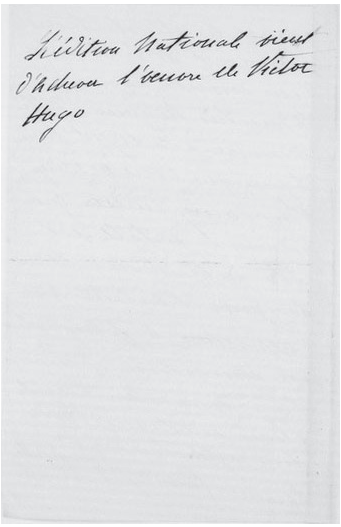
Caraman Chimay Greffuhle
16 oct[obre] [18]95[51)]

50） BnF, n.a.Fr. 22464, f° 313. En-tête : 8. Rue d'Astorg.

51） BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 314, 315. En-tête : Bois Boudran Nangis Seine & Marne.



② BnF, n.a.Fr. 22464, f° 310.



③ BnF, n.a.Fr. 22464, f°s 311, 312.